

藝大の在校生・卒業生は、
公募展やコンクールで栄誉ある賞を受賞し、
また各分野の最前線で活躍している。
若き才能がふだんの努力とさらなる意欲を語る。

第26回 2010日本ジュエリーアート展 優秀賞

寺嶋孝佳

◆美術学部工芸科(彫金)4年

ぼくは高校(東京学館総合技術高等学校。現・東京学館船橋高等学校)のときから工芸科に通っていました。工芸科に進んだのはじつはたまたまで、当時その高校に普通科がなかったからなんです。そもそもバレーボール部が強い学校だったのが進学の原因で、バレー部では「春高(全国高等学校バレーボール選抜優勝大会)」やインターハイにも出場し、キャプテンも務めました。

もともと図工は好きだったものの、「工芸」のイメージというと、陶芸や木工のイメージしかありませんでした。工芸科で学ぶうちに金属という素材に魅力を感じるようになり、高校の卒業制作では金工を選びました。金属は磨くことによって、ピカピカにもザラザラにも加工することができる。また溶かしたり、叩いたり、削ったり表現に幅があって、ガラスや土よりも惹かれるものがありました。高校3年生の夏、バレー部がインター

ハイで負けて進路に迷っていたとき、藝大を卒業した工芸科の先生方に、藝大進学を薦められました。入学を果たせて、その高校を卒業した初の藝大生になったときは、先生方も自分のことのように喜んでくれました。

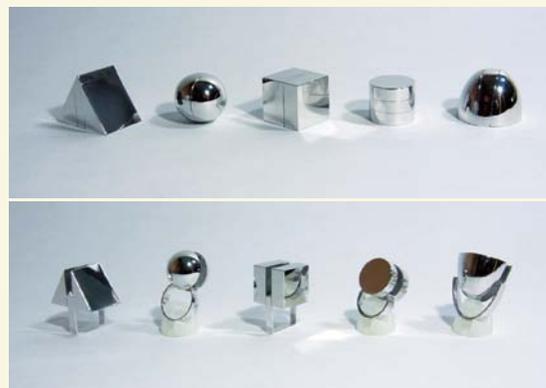
藝大での4年間はとても充実していました。創作に集中する環境や設備が整っているうえに、先生方も学生と同じ空間にいてくださるので、迷ったときはすぐ相談のってもらえる。きっと工芸の世界ならではの、背中を見て学べ、技術は盗むものであるという技術継承の伝統を引き継ぐものなのでしょう。藝大での学生生活をとおして、新しいものを追おうとして壁にぶちあたったときは、考えこまず、手で作業をしながら糸口をつかむものだということを学ぶこともできました。

今回優秀賞を受賞した「日本ジュエリーアート展」は、第26回という数字が物語るように、とても歴史のある公募

展なんです。ぼくは当初「アンダー26」という年齢制限がある部門に応募したのに、一般部門で優秀賞をいただいたのは大きな驚きでした。

ぼくは金属を使ってオブジェをつくることもあります。いまはジュエリーが中心です。ジュエリーのよさは、身につけて、外にも持って出かけられるという点です。そして、部屋に置いて、小さな彫刻として鑑賞することもできる。ぼくの作品は「動くジュエリー」というのが特徴で、受賞作もジュエリーの一部分が動いて形が変わるんです。手に持って遊び、動かして楽しむ、変身のおもしろさ。モチーフの根底には、子どものころに見ていたロボットアニメや戦隊もののヒーローがあるかもしれません。

思いもよらぬ動きに“ワクワク”する感じや変化する驚きを、ぼくと共有してもらえる作品をつくり続けていきたいですね。



寺嶋孝佳「Transforms」

てらじま・たかよし

1986年千葉県生まれ。2007年東京藝術大学工芸科入学。2009年「第10回全日本金銀創作展」で全国伝産金工組合協議会会長賞を受賞。2010年に「2010日本ジュエリーアート展」で優秀賞を受賞。

第79回日本音楽コンクール作曲部門第1位

三宅悠太

◆大学院音楽研究科修士課程作曲専攻2年

実家に古いリードオルガンがあって、幼稚園のころから簡単な即興演奏を家族に聴かせたりしていました。小学校に上がってからも、楽譜にはうまく書けなくても和音からメロディーをつくるようなことはずっと続けていました。中学1年生のとある日、なんとなくテレビを観ていた時にX JAPANの「Forever Love」が流れていて、その音楽にこれまで感じたことがない全身がゾクゾクするような感動を受け、目覚めてしまったんです。音楽は凄いな。こんなことができるのなら作曲家になりたいと突き動かされました。それからX JAPANの曲を耳で覚えて弾いたり、パソコンのDTM（デスクトップミュージック）を使って作曲をしたり、合唱部に入ってさらに音楽に触れるようにもなりました。

藝大に進もうと思ったのは、クラシックをあまり知らないのがコンプレックスでしたし、ポピュラー音楽にばかり触れていると、どうしてもその枠の中にはまってしまうと危惧したからです。X JAPANのリーダーのYOSHIKIもその

ころ好きだった坂本龍一も、クラシック音楽をルーツにしている。将来どんな音楽の分野へ行くにせよ、クラシックを学んで自分の音楽性を深め広げたいと思いました。

藝大では、芸術に対してさまざまな価値観をもって日々闘っている仲間からいろいろな刺激を受けて過ごせたということが、一番の思い出でもあり収穫でした。また、作曲家は演奏家というフィルターを通して内なる音楽を“表出”するわけですから、レヴェルの高い奏者が集まる藝大では、演奏家から多くの学びを得ることができました。

第79回日本音楽コンクール作曲部門第1位を受賞した《打楽器独奏とオーケストラの為の「響奏」》は、木質・膜質のさまざまな打楽器をソリストが独奏し、オーケストラと時間を共生し響きを奏でていく曲です。作曲した当時は「間」の緊張や響きの空間性（余白）のようなものに強く惹かれていて、それを打楽器独奏とオーケストラという形態で具現化できたら何か面白い音楽が生まれるかも

しれない、と思いました。歴史的にはあまり書かれていない編成でしたが、作曲する時は自分自身が新鮮でないと嫌ですし、未知なるものをつかまえてみたいという気持ちが強かったですね。音楽はある意味時間を束縛する芸術ですから、緊張感の途切れない切りつめた時間をつくり上げたいという一心で、作曲に臨みました。歴史あるコンクールでの第1位は、嬉しさと同時に“妙な”気持ちが湧き起こりました。未熟な自分がこういう立場になっているのが不思議で、教育実習で母校に行った時の心境とまるで同じ。これからも地道に音楽・人と向き合い、学んでいこうと思いました。

最近では、例えばブータンの仏教音楽や、地声で歌われる土俗的な民謡など、西洋音楽のように淘汰されていない生々しい音楽のほうに心が惹かれます。それが作品の創作にどうかかわってくるかは未知数ですが、自分にとっての真実と対峙し続け、そうして生まれた作品が誰かを豊かにすることに繋がっていったら、それが私にとって一番の幸せです。



三宅悠太作曲《打楽器独奏とオーケストラの為の「響奏」》楽譜

みやげ・ゆうた

1983年東京生まれ。2001年国土交通省CM音楽公募において優秀賞受賞、翌年TV・ラジオ放送。2005年第16回奏楽堂日本歌曲コンクール作曲部門第1位入賞。2010年第79回日本音楽コンクール作曲部門（オーケストラ作品）第1位入賞、併せて明治安田賞および岩谷賞（聴衆賞）受賞。東京藝術大学音楽学部作曲科をアカンサス音楽賞および同声会賞を受賞して卒業後、現在、同大学院音楽研究科修士課程作曲専攻在学中。現代音楽をはじめ、舞台音楽、合唱・吹奏楽の作編曲、合唱指揮・指導などにも力を注いでいる。聖心女子大学教育学研究室授業助手。朗読表現団体（声の会）専属舞台作曲家。





ひらた・りょうま

1984年奈良県生まれ。2007年関西大学商学部卒業。2009年東京藝術大学大学院映像研究科修士課程映画専攻（映像制作技術・編集領域）修了。2010年大学院映像研究科映画専攻編集領域の教育研究助手を務めるとともに、フリーの映像編集者として活躍。編集作品に「ラッシュライフ」、「イエローキッド」、「よるのくちぶえ」などがある。「イエローキッド」（2009年・真利子哲也監督）は、2009年バンクーバー国際映画祭、2010年ロッテルダム国際映画祭、2010年香港映画祭コンペ部門の招待作品となった。



「イエローキッド」より

「イエローキッド」

2009年バンクーバー国際映画祭招待 / 2010年ロッテルダム国際映画祭招待

平田 竜馬

◆大学院映像研究科修士課程映画専攻修了

関西大学に通っていたころから、学外にサークルをつくり、自主映画を撮り始めました。ぼくは奈良県の出身で、高校時代は野球部に所属。自主映画サークルは、野球部の仲間呼びかけてぼくが立ち上げたものです。

映画が好きになったきっかけは、小学校を卒業したてのころに友達と「トイ・ストーリー」を観に行ったことでした。親に伴われずに映画館で映画を観たのはそれが初めてのことで、以来映画にはまってしまいました。家の近くには映画館がなかったので大阪まで出かけて、単館系の映画にも足を運びました。洋画よりも邦画が好きで、高校生のころにはもう将来は映画の仕事に就きたいと思いはじめていましたね。

ぼくは井筒和幸監督の映画が好きで、「岸和田少年愚連隊」（1996年）は何回も観ました。井筒監督作品のよさは、土着のもつリアルさがとてもよく表現されているところです。笑いを得るために多

少大袈裟に写しても、リアルであるということ絶対に崩さない。「パッチギ！」（2004年）でもそうです。

大学時代には自主制作映画を5本つくりましたが、監督と脚本、撮影、編集をぼくひとりが兼ねていました。藝大大学院映像研究科の創設（2005年）を知ったのは大学在学中で、卒業後に進もうと思ったのは自然ななりゆきでした。7つに分かれた専門領域から編集領域を選んだのは、自主制作映画をつくる作業のなかで編集がいちばん楽しかったからです。

映画における編集の仕事は、撮影現場で監督を含めたスタッフがつくってきた上映時間の3～5倍ある映像を、最終的に上映する形に仕上げる役割を果たします。ナマの素材に触れられるのはとてもやりがいがあることですし、大きな責任も負います。監督の意図とすりあわせるディスカッションは連日にわたり、編集の立場から、現場の人間では気づいて

いないアイデアを提案していく。制作スタッフのなかで、映像がもっている力を客観的に見られるのは編集のぼくだけです。その誤差を埋めることがディスカッションの中心になります。「イエローキッド」で真利子監督といちばん議論したのは、「間」のつくり方でした。カット尺の長さやテンポの置き方は映画を感じる時に大変重要な部分ですから、徹底的に話し合いましたね。

映画編集者として憧れているのは鍋島惇さんです。山本薩夫監督の文芸大作から日活口マンボルノまで幅広く手掛けた方で、ドキュメント映画の傑作「ゆきゆきて、神軍」（原一男監督・1987年）は編集の力というものをまざまざと感じさせてくれる作品でした。

「イエローキッド」は、世界各地の国際映画祭に招待され、劇場公開もされました。これからも刺激的な素材と出会い、おもしろい映画をつくっていきたいと思っています。